

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390101735		
法人名	(有) プレム・ダン		
事業所名	グループホーム凜として		
所在地	岡山市中区原尾島4-4-19		
自己評価作成日	令和4年1月12日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=3390101735-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 One More Smile		
所在地	岡山県玉野市迫間2481-7		
訪問調査日	令和4年3月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「グループホーム凜として」は利用者様1人1人の好きな事、今できる事に働きかけその人らしく暮らせるように支援しています。又職員は日々の関わりを大切にしながら利用者様に寄り添い信頼関係を築きニーズに沿ったケアに努めています。日々の支援の中での気付きは職員間で共有し生活の質の向上に向上に努め心に寄り添う介護を目指しています。食事にこだわりを持ち季節の旬を取り入れたメニューや行事食を提供し食事を楽しめる工夫をしています。感染症対策にも力を入れており特にコロナ感染対策には力を入れており、抗菌、防除機能のある加湿噴霧器を設備しています。併設の小規模多機能事業所とも連携、協力して職員のスキルアップの為に研修を定期的に開催し介護技術の向上、資格取得に取り組み、介護の質の向上を図りたいと考えています。今年においてはコロナ感染拡大防止に置いて、行事企画又は外部の研修参加は見合わせています。コロナ禍でご家族様面会の規制の中出来る限りお電話等で御本人と会話されたり、職員が様子の報告をさせていただいています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

この2年余りのコロナ禍にあって、グループホームもかつてない様々な試練に立ち向かっているが、その経験は今後の運営に対する糧でもあり、思いがけない副産物(家族との関係性の再確認・再構築)をもたらす事もある。ホーム開設以来掲げてきた「利用者の心に寄り添うケア」は揺るぐ事なく貫かれており、その指針は職員の心にもしっかりと根付いていて、「第二の家庭」である今の「凜として」を築き上げてきた。同一敷地内に小規模多機能ホームを併設しており、共に連携しながら歩いてきて、この4月で「凜として」は7年目に入ろうとしている。これからもこのホームのコンセプトである自由に動きやすい空間の中で、利用者が満足・安心して暮らせるホームであり続ける事を願うと共に、今後の地域での活躍を期待している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は意識して日常的に取り組めるように、ホールに掲示している。ミーティング時等、定期的に振り返り取り組む機会を持ち、実践に繋げるように努めている。	ホームが設立以来目指してきた「心に寄り添うケア」は、職員の中にも浸透し、その理念はぶれることなく一貫して日々のケアに活かされている。また、利用者一人ひとりを大切に思う熱い心も管理者・職員との会話の中で十分伝わってきた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近所の方々との挨拶、夏祭等で交流を図るようにしているが近年コロナ禍の為参加出来ないのが現状である。ゴミステーションの清掃も順番で回ってきている。時に隣の小規模多機能おかげさんに覗いている。	今までのような形での地域との交流は難しいが、利用者がゴミステーションの掃除をしている写真も確認でき、可能な範囲で社会参加や地域交流をしている。散歩時で会った人との挨拶や併設する小規模多機能ホームへ出入りする人達との交流は続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	なかなか出来ないのが現状ですが、運営推進会議等で資料を渡したりと地域内におけるホームへの理解が高まるように努力している。民生委員の方の協力も頂いている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回開催。地域の民生委員、家族様・包括支援センター職員・近隣住民が参加しサービスの向上に繋げるよう努めている。近年はコロナ感染拡大防止にて書面にて意見交換しています	書面での運営推進会議を定期的に行い、市へも報告している。併設する小規模多機能ホームの施設内で合同で行っており、町内会長、民生委員、包括、家族等にも資料を送付している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村担当者には事業運営等について分からないことがあると相談し助言を受けている。事業所指導課にも相談している。福祉事務所とも連絡をとっている。	岡山県内も何度目かの「まん延防止等重点措置」が出る等、急速な新型コロナウイルス感染拡大に伴い、防止対策や対応の為に市へ相談したり、何かあったら報告する等、今まで以上に密に連絡を取り合った。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員間で委員会を作り、拘束についての勉強会を開き、拘束についての理解を深め、拘束をしないようにしている。又拘束をしないケアが当たり前と認識している。年4回委員会を開催している。今はコロナ感染拡大防止の為書面にて意見交換している	身体拘束・虐待防止委員会の議事録があり、話し合っている事が分かる。特に、身体拘束をせずに行うケア「三つの原則」を職員は十分に認識をして実践している。現在、身体拘束を必要とするような状況の人もなく、比較的皆さん穏やかに過ごしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法に関する理解と日々業務にあたっている。施設内の勉強会をしミーティング、申し送り等で全職員が周知し、問題事案があれば話し合い防止に努めている。年4回委員会を開催している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用されている方がおり、定期的に後見人の方が面会に来られて話す機会を作っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に重要説明事項にて説明し、理解を得るようにしている。また、質問には謙虚に対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	①面会時に家族からしっかり話を聞くようにしている。 ②運営会議においては現在コロナ禍の中書面にて報告し意見、質問等聞いている。 ③意見箱を玄関に設置している。	家族とは日頃からよくコミュニケーションを取るように心がけているが、コロナ下での様々な状況や環境の変化がある中、より密接な協力関係・信頼関係を再確認出来たと聞いた。運営に対しての意見や要望も真摯に受け止め反映するようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的にミーティングを開催、意見を交換をおこなっている。新人職員にも意見を出してもらい反映している。今年もその時々でコロナ感染拡大防止の為、集まったり集まらなかったりで個々に意見交換を行っている。	職員間の連携はよく取れており、忌憚のない意見交換をし合っている。新しい職員の中には東南アジア出身の介護職員もいて、一味違った良い関係性が出来ていた。マンパワー不足が懸念される介護業界にあっては貴重な存在かもしれない。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格の取得による手当等独自のシステムがあり向上心が持てるように整備されている。介護職員処遇改善手当も評価システムを導入し支給している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修・講演等はコロナ感染の為不参加である。運営推進会議時、行政・後見人等の専門的な方の意見を聞くことが出来るようにし職員に伝えている。時期に応じ施設内勉強会を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者については同業者と情報交換の機会があるが、スタッフレベルでは継続的な実現ができていない。今後の取り組みとしてコロナ感染防止に努めながら行っていく。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の面談や連絡を取る中でしっかりと不安に思っていること困っていること要望などを聞き、ご本人の思いを受け取るようにしている。安心できる雰囲気づくりに努めている。ミーティングでも意見交換している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との関わりは大切なので、家族の気持ちをしっかり聴き、要望や思いに沿った支援ができるように努力している。入居後も情報交換しながら信頼関係の構築に努めている。定期的に様子の連絡している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族等の実情や要望等をもとに、必要なサービスを見極め、必要に応じて対応している。徐々に生活に馴染めるよう、本人のペースを大切に、関わりを持つように努め安心した生活を送れるよう支援する		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と一緒に食事を作ったり、洗濯量、食器拭き等出来るところをして頂き意欲を高め、一緒に活動したり過ごす時間を増やすように努めている。近所であるが職員と一緒に散歩にも出かけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設からも状況説明、報告は来所時や電話にて知らせている。時に御本人とも電話を代わり会話して頂いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている	現在コロナの影響で御家族様了承の上時間制限を設けている、知人等の方には面会は御遠慮して頂いているがガラス越しの面会も検討している	コロナ禍の為、直接の面会は難しいが、駐車場に面したリビングの掃き出し窓からも、中の利用者の様子が伺え、窓越し面会は可能である。これまでの家族との絆や馴染みの関係を途切れさせないように出来る限りの支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中も、自室へ戻ることがほとんどなく一人で過ごすことが少ない。利用者同士で支え合う場面も見られる。利用者間の相性を把握し状況に応じて職員が介入し利用者の相互関係が良好になるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設に移ってもご家族の要望があれば出来る限りサポートするように努めている。またご家族の状況変化に応じ転居等の支援も行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中で希望や意向が聞けるような馴染みの関係作りに努め、プランに反映するようにしている。言葉での表現が困難な場合は、様子、態度等を観察し意向を把握するように心掛けている。	もっと簡潔・明瞭にポイントを押さえて記録するようにと、数か月前から日々の個人支援記録の様式を変更した。日頃から利用者とのコミュニケーションをしっかりと取りながら、会話の中からも思いや希望を把握するように努めている。	新しい介護記録には「気づき・推測」を記入する欄があるが、殆ど記入がなく活かされていないので、利用者の言動に対して、何故そうなったのか皆で共有し、原因を探る意味でも、もっと有効に活用して欲しい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人だけでなく、ご家族や入居前に利用していたサービス事業者、ケアマネからも話を聞きアセスメントを作成している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員それぞれの視点での気づきを大切に、状況の変化等を日々申し送りや記録等で情報共有し、現状の把握に努めている。変化があれば管理者に連絡としている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ミーティング、カンファレンス等で話し合い、モニタリングしケアプラン作成に役立てている。本人や家族の意向や思いを取り入れ反映した計画作りに努めている。	日頃から利用者の心身の状態や意向をよく把握している管理者が個々のケアプランを練り、介護支援専門員の施設長が最終的に皆とよく話し合いながら作成しており、楽しく笑いのある生活になるように精神面にも重きをおいたプランになっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子は記録に記入している。身体的状態の変化は赤字で記入している。職員間で情報を共有し実践や介護計画書の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	大まかなタイムスケジュールを作成し、細かい対応は随時行ったり、必要に応じたニーズに合わせて職員が相談しながら柔軟に対応している。ミーティング等でも話し合う様にしている。入居者のかた中心の考えである。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議で地域包括支援センターの職員、民生委員の方との情報交換を行っている。令和2年4月からはコロナの影響で関係者の方々には文書で通知、意見交換を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の往診に来てくださり、それ以外での特変にはその都度、連絡(電話)などで密に情報交換を行っている。担当の薬剤師の方とも密に連絡をとっている。	利用者は全員ホームの協力医を主治医としており、定期的な往診で健康管理もしている。他科受診が必要な場合は主治医からの紹介状や従来のかかりつけ医を受診する場合もあるが、原則家族に付き添いをお願いしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	かかりつけ病院の看護師と連携を図り、日頃の状況や状態の変化、緊急時は相談、連絡、対応や病院受診の必要性について指示を仰ぎ支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	緊急時の対応、搬送先などもかかりつけ医と随時話し合っている。入院した場合、情報提供を早急に出来るように普段から状態変化を記録するようにしている。、保険証、薬手帳等をまとめたファイルを作り、緊急時に慌てないように心がける		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院時は職員が病院へ付き添い、本人の生活状況や既往歴等を伝え介護添書でも伝えている。入院中も定期的に訪問し、情報交換を行い、病院関係者と連絡、調整を行い、早期に退院できるように支援している。	容態が急変し病院搬送後に亡くなった人や医療が必要となり入院した人はいるが、ホームでの看取りはない。今は重度化したり、ターミナルの人もないが、本人・家族からの希望があれば医療機関と相談しながら出来る限りの支援をしようと思っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の備えについては報告書等で日々伝えていっている。又ミーティング等での危機管理の意識向上を心掛けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	運営推進会議にて、災害時の避難場所の確認をしたり情報収集を行っている。避難訓練は年2回実施している。又疑問点がある場合、管理消防署に確認している。	火災を想定した避難訓練では、避難経路を確認しながら駐車場の送迎車に乗り込むまでの訓練を利用者と共に行ったり、土砂災害、水害(洪水時)等の設定ではエレベーターを使わず階段での垂直避難を行う等、様々な災害時対応の訓練をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	丁寧な言葉使いと本人が理解しやすい言葉使いと大きい声では呼ばないよう意識して対応している。またミーティングで日々の対応を振り返る機会を持ち、意識を深めている。	自尊心や羞恥心への配慮もしており、特に入浴介助、排泄介助時の声かけやケアに心がけている。例えば、バスタオルを掛けてのシャワー浴、排泄の失敗時への迅速な対応とプライバシーの保護等、職員間でもよく話し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	生活の中で、本人の意向を確認しながら支援するように努めている。また状況に応じて声かけを工夫し、自己決定出来るように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活のペースを大切に、各々が過ごし易い場所で過ごしたり、外出等のニーズに対応し、要望に添えるように支援しているが現在はコロナ感染防止の為外出は控えている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に訪問理容サービスを利用し身だしなみについて常に気にかけて支援をしている。職員も1人1人の整容にも時間をかけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事メニューの掲示により目で見てわかる工夫をしている。利用者様のなかで出来る方は、盛りつけ、配膳、食器拭き等のお手伝いをして頂き、達成感を味わって頂いている。	五感で楽しみながら食事をしてもらおうと、食材は外注だがホームで調理をし、味見や小鉢に盛り付けするのを手伝ってもらっている。お正月には職員手作りのおせち料理を提供したり、おはぎ作りや包丁でキャベツを切っている利用者の写真もあった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量・水分量を記録し摂取量の確認と確保の意識づけを実施している。利用者様の状態により食事の形態・形状を検討しその人その人に合わせた支援をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声かけ・見守り・確認をし歯磨き、義歯の清潔の確保に努めている。また数名の方は、定期的に訪問歯科により口腔内のメンテナンスを実施している。夕食後には入れ歯洗浄剤を使用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表に記入しその方の排泄パターンを把握するように努めている。同時に個々の排泄のサインや行動をみてトイレ誘導を行うようにしている。	夜間用にポータブルトイレを置いている人もいるが、殆どの方はトイレを使用し、ウォシュレットで清潔を保っている。紙パンツの人も日中・夜間とパットの種類や大きさを検討し、個々に合った物を提供して快適に過ごしてもらうようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	トイレ時腹部マッサージしたり、ウォシュレット使用している。レク等で体を動かす運動もしている。必要に応じて畑クリニック、畑先生に相談し便秘薬の内服にて排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	午後の時間帯で実施している。意向を確認し、無理強いくことなく支援している。入浴出来ないときは清拭、衣類交換を行い、個々に合わせた物品を使用している。	週3回を基本とし、一日3人ずつ入浴しているが、時間帯はその人に合わせて中にはいつでもOKにしている人もいる。シャワー浴1名以外は浴槽に入る事が出来、拒否が激しい人には、禁句を避け入ってもらえそうな言葉かけを工夫しながら支援をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活習慣を大切に、休みたい、また休息が必要だと感じた場合はゆっくり休めるように支援している。夜間、眠れない時はお話ししたり、暖かい飲み物を提供したりと、安心して眠れるように個別対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬については服薬情報のファイルを常時確認するようにし、服薬の追加、変更、中止等があれば連絡ノートに記入し体調管理に努めている。状態の変化は情報共有し畑Drに報告、健康管理に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々に合わせた作業や役割をして頂きながら、無理せず楽しんでもらえるように心掛け、気分転換にもなるように支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在コロナウイルス感染防止の為外出は出来ていないが、個別対応で状況に応じて散歩等の支援をしている。	全員揃ってとか遠くへのドライブや外出は今の時期難しいが、天気の良い日はホーム周辺の散歩や庭先で日向ぼっこなどを楽しんだり、近所に公園もあり四季折々の花や草も鑑賞出来るので、散歩がてら気分転換をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者様の預かり金として施設で管理している。その方の能力に応じて使ってもらっているが認知症の進行に伴い御家族の了承を頂き、ほとんど職員が代わりに行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	必要に応じて支援しているが電話をかけたり、かかってきた電話で話しをしたりするが、時に御本人の混乱を招くこともあるので配慮が必要である。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	不必要なものは置かないように努め、季節に応じた飾り付けも心がけている。また湿度管理にも注意をはらい除菌作用があるコアクリンを使用し加湿器で噴霧している。	リビングは明るく開放的で、日中は殆どの方がリビングで過ごしている。一人いる男性利用者も、女性たちの中で一緒にアクティビティを楽しんでおり、それぞれがお気に入りの場所で寛いでいた。利用者同士の関係にも配慮しながら席の配置換えをし、皆が気持ちよく過ごせるように努めている。	皆でよく歌うという童謡や歌謡曲を歌う場面でもただ歌って終わりではなく、例えば「ふるさと」ではその人達のふるさとや思い出話を聞いたり、「瀬戸の花嫁」では若い頃の話聞き出す等、回想法を取り入れてみるような工夫が欲しい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブル席の配置を工夫したり飾り棚を置くことで共有空間の中での個々の居場所を作ることができている。気の合う方が過ごせる空間づくりも工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時、使い慣れた家具や生活用品・趣味・小物を持って来ていただいている。居室にご家族の写真を置いたり、心地よい空間づくりに努めている。	ワンユニットであるが1階・2階に居室があり、階段の幅も安全を考慮した設計になっている。馴染みの品々を持ち込み、安心して寛げる居室になっているが、日中はリビングで過ごす人が多く、居室は休憩や就寝時に利用している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の前には名札をかけ、分かりやすくしている。また安全に気を付けて入居者の動線には注意をしている。		